



写真：小中交流の様子 左から吉田中学校区、下条中学校区、松之山中学校区（説明は7ページ）

巻頭言 『SNS と ネット いじめ』

学校教育課 指導主事 小林 信之

昨今、SNS を介した“ネットいじめ”が問題となっています。デジタル技術の発展により、「SNS」「メッセージアプリ」「ゲームアプリ」「スマートフォン（携帯電話）」など、多岐にわたるデジタル技術を利用したいじめのことを“ネットいじめ”と呼ぶそうです。大人の世界でも、ネットを介した誹謗中傷やフェイクニュースなども大きく取り上げられており、社会問題となっています。

さて、“デジタルネイティブ”と呼ばれる世代にとっては、SNS は重要なアイテムの一つです。ここで、「SNS と ネット いじめの関係」について、ChatGPT でまとめてみました。

- ① SNS の匿名性が助長する…匿名性により、誹謗中傷を行うハードルが下がる。
- ② 情報が瞬時に拡散される…ネット上の広がりによるリアルな生活への影響大。
- ③ 公開されるプライベート情報…写真・動画をいじめの材料にされる可能性。
- ④ 集団でのいじめがしやすい…情報共有がし易いことが、集団での攻撃に繋がる。
- ⑤ いじめの証拠が残る…いじめの証拠⇒悪用され、更なるいじめにつながることも。
- ⑥ いじめに対する感覚の鈍化…被害者と直接接しないため、責任を感じにくい。
- ⑦ SNS 上での誹謗中傷が現実世界にも影響…実際の人間関係の悪化、対面での暴力。

このように、SNS の利点である「情報の共有と迅速な拡散」「コミュニケーションの促進」「自己表現や自己アピール」等の裏返しだが、SNS の危険性に繋がっています。

私たち教職員や保護者等の大人は、デジタルネイティブである子どもたちに対して、SNS の使用を制限するのではなく、正しい使い方を教えていかなければなりません。そのためには、我々大人が様々なメディア機器や SNS 等のコンテンツへの理解を深めていく必要があると思います。それが、ネットいじめの未然防止や児童生徒の SNS リテラシーの向上に、間違いなく繋がると思います。

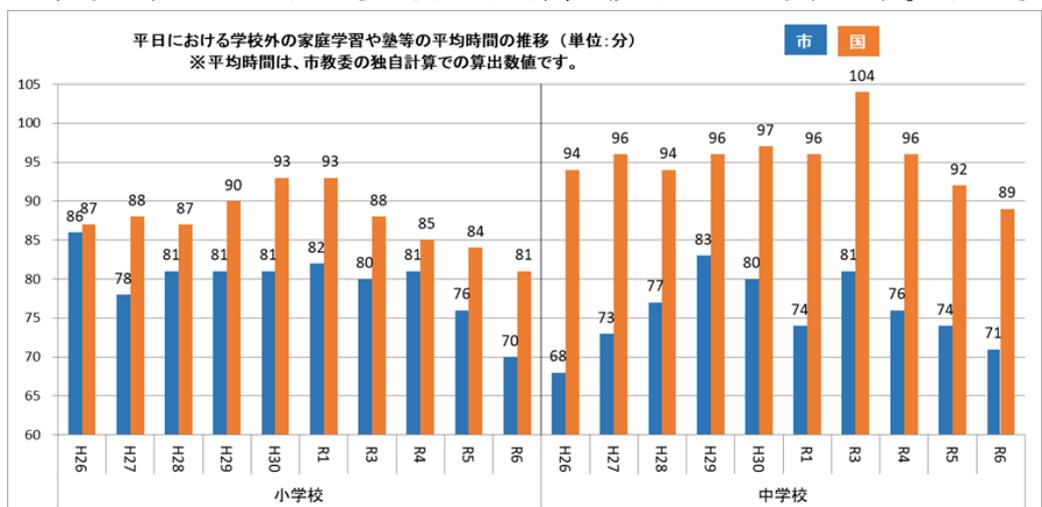
小中一貫教育

■ 小中一貫教育取組評価アンケートから考えること

小中一貫教育取組評価アンケート集計が終わりました。実施に当たっては、皆様からご協力をいただきありがとうございました。児童生徒・教員のアンケートでは、「学校で楽しく過ごしていると感じている子」「違う学校や違う学級との交流は楽しいと感じている子」「好きな授業や得意な教科があると感じている子」「自分にはよいところがあると答えた子」「いじめはどんな理由があってもよくないと答えた子」「自分の住む地域や十日町市が好きだと答えた子」「個別の指導計画を作成または利用し、改善を加えながら個別指導をしている教員」「今年度特別支援教育の研修に1回以上参加した教員」の割合が、データを取り始めてから過去最高値を示しています。また「中学校への進学を楽しみにしている子」「共通実践を意識して取り組んでいる教員」「地域教材や地域人材を積極的に取り入れている教員」の割合は、高い水準を維持しています。これらの成果は、各校、各中学校区での組織的で熱心な取組のおかげだと思います。

その一方で、「英語を話せるようになるために勉強したいという子」「将来の夢や目標がある子」「地域行事やボランティア活動に参加している子」「家や塾での学習をしている子」が目標に届かず、工夫をした取組が必要と感じます。特に「家や塾での学習をしている子」については、低下傾向に一定の歯止めがかかりましたが、身に付けるべき基礎・基本の定着という観点から極めて深刻な状況だと思えます。全国学力学習状況調査の結果（棒グラフ）からも全国比で大きな差があることが分かります。今年度低下傾向に歯止めがかかったのは、年度当初に家庭学習の取組を工夫するようお願いしたことを真摯に受け止めて実践してもらった成果とも受け止めています。小中一貫教育第2回計画訪問では、資料として10月末に各校・中学校校区から提出してもらった取組をまとめたものをお配りしました。子どもの家庭学習を促す取組として成果が見られるのは、学校で家庭学習にどう取り組むかを子どもが決める時間を設けている取組です。子ども

が、学校から帰ってからの限られた時間をどう使うかを主体的に考えられる働きかけが効果を上げていないでしょうか。来年度も引き続き課題としていきたいと思えます。



■ 川西中学校のサポート訪問公開授業研究に学ぶ

11月12日(火)に川西中学校で3年生社会科(公民分野)の公開授業がありました。川西中学校区の小学校からの参観者と一緒に、私も参観と授業協議会に参加させていただきました。

単元名は「現代の民主政治と政治 現代の民主政治(政党の役割)」です。事前のアンケートでは、国の政治・選挙に興味のある生徒は「ある」15%、「まあある」50%で、選挙に行きたいと思う生徒は「思う」40%、「まあ思う」20%と両方とも肯定的な回答が過半数です。授業者の構えは、現代の政治の課題にふれ、「若者の投票率」「有権者の意識」について考え、現代の有権者の意見を多角的にとらえて、課題解決に向けて考えていくようにすることです。



単元では、政党に興味を抱く生徒が多かったので全7時間を次のように指導計画を立てたそうです。

1時 政治と民主主義：なぜ民主主義に基づく必要があるのか考える。

2時 選挙の意義と仕組み：小選挙区制や選挙の仕組みを調べまとめる。

☆3時～5時 政党の役割

3時 政党の政権公約を調べ、比較することで日本の政治について関心をもつ。

4時 調べた政権公約をもとに、自分たちが作った模擬政党のマニフェストを作る。

5時 自分たちの政党の政権公約を発表し、質疑応答を行う。各党の政権公約をもとに公正に判断し模擬投票を行う。結果をもとに選挙の意義についてまとめる。

6時 マスメディアと世論：マスメディアの役割と政治に与える影響をとらえる。

7時 選挙の課題と私たちの政治参加：政治にどのような関わりをしていくか考える。

授業者は、3～5時を生徒が課題ごとに政党を作って探究的に学ぶ時間を設定しました。このうち5時を公開してくれました。

私は、3年後には選挙権を得る中学3年生という発達段階にある生徒が、課題に対してどのような政党を作り、エビデンスに基づいて実行可能な公約をどのように作り、それに対してほかの生徒(政党)がどう質疑するかを興味深く見ることができました。

生徒は4つの政党を作って公約を発表しました。政党ごとの公約、他の生徒の質疑を要約して紹介します。

.....

1 「プレゼン党」(税金が高く、子育てが大変だからなんとかしなくては)

○公約 高卒まで1人6万円を支給して子育てを支援する。

国会議員報酬を削減して財源を生み出す。

国会議員報酬1人126万円から20万円を減額する。衆参の議員×20万円×12か月で予算を生み出す。

Q：予算は足りるのか？足りない場合にはどうするか？

A：がんばって実現する。

2 「子育て党」(少子化傾向の課題をなんとかしたい)

○公約 子育て層への現金支給をする。

富裕層の課税率を上げて財源とする。

(人口ピラミッドを示し)2050年の出生数は年50万人になる。今の子育て層約133万人に現金を支給し、子育てし易い環境をつくる。そのために(所得による税率票を示し)年間所得2,000万円の人の税率を5%上げる。

Q：税率を上げると高額所得者から文句が出るのではないかと？

A：がまんしてもらおう。

Q：税率を5%上げるのは多すぎないかと？

A：これからの日本のためには仕方がない。

3 「子どもを作らないとう（党）」（子どもを産み育て易い社会を目指したい）

○公約 産休・育休をとり易くする。

保育士の給料を上げて子どもを預けやすくする。

50代～70代の人々の有償ボランティアを増やし健康長寿社会を作る。

Q：保育士の給料をどう上げる？財源はどこから生み出す？

A：たばこ税を上げる。また、保育士の魅力を感じてもらえるようにする。

Q：お金の問題で子育てに困っているのなら、保育費を無償にしてはどうか。

4 「減消費税党」（消費税負担が重く、生活し易い社会をつくりたい）

○公約 消費税率を下げた生活し易くする。その反面、社会保障がしにくくなる。

所得4000万円の税率上限をなくして、消費税減少の穴埋めとする。

Q：納税を守らない違反金の増加分が分からないと効果がないのではないかと？

A：メディアを活用して周知する。

Q：消費税をどれくらい下げたらいいかと？

A：具体的な数字は今は分からないが、生活し易くする方に回せる分だけ回す。

生徒の真剣な議論が授業を熱く盛り上げました。各政党の発表を聞いている生徒は、公約のどこが良くて、どこに問題があるかを互いに小声で話し合っていました。政治を身近に感じられない世代（私が勝手にそう決めつけているだけか）の生徒が自分の頭で考え、議論する姿は、とても新鮮に感じられました。

このような探究的な学習が子どもを主体的で対話的な学びに導くのだと感じました。

今、高校で熱心に進められているのが探究学習です。探究学習とは、生徒自身が自分で問題を設定し、その問題を解決するために情報を収集・分析し、意見を交換したり協働したりしながら進める学習活動のことです。

反対に、探究的でない学びとは、先生が答えを知っており、教科書を使った講義を受けて、正解が決まっている問題を解くような授業を受けることだと言えます。探究学習では、あらかじめ決められた正解がない中で答えを考え出す活動を通して、導き出した結果だけでなく、どうやってそこにたどり着いたのかのプロセスが非常に重視されます。

探究学習では、自分がやりたいことや、興味・関心を持っていることについてじっくり学ぶことができるよさがあります。そのため、決められた課題をこなす時よりも学びの質が高まり、学びそのものへの前向きな姿勢を持ち続けることができます。また、身に付けた知識を実際に使って問題を解決することで、勉強したことと実社会との結びつきを実感しやすくなるよさもあります。さらに、各教科で身に付けた資質・能力、見方・考え方を活用しながら探究することにより、より深い学びにつながります。正解や不正解を求められないので、自己肯定感や自己有用感が高まるのです。

このような授業が市内の中学校現場で行われていることに大きな喜びを感じる時間でした。

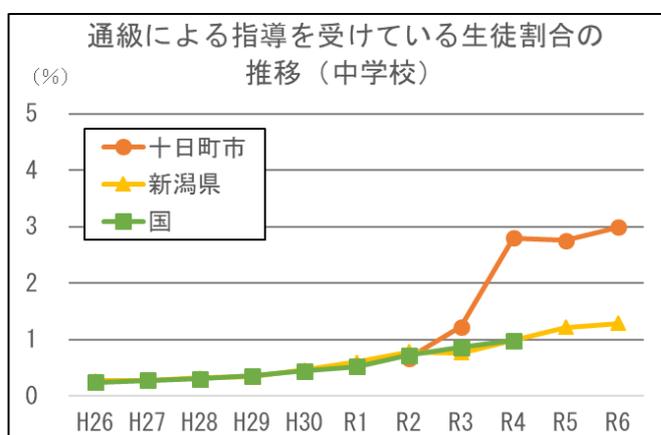
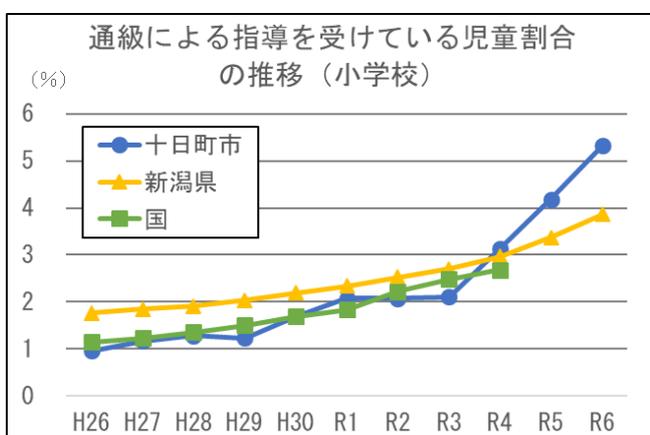


教育相談班より

■ 通級による指導の効果を通常の学級に！

近年、特別支援教育を受けている児童生徒数は、全国及び県ともに増加しており、特に通級指導を受ける児童生徒数は大幅に増加しています。よって、通級指導教室の設置数も増加しており（下記グラフ参照）、十日町市においても同様の傾向があり、令和7年4月より、西小学校に「発達障害通級指導教室」を新設することになりました。

通級による指導を受けている児童生徒にとって、「通級の時間」はとても重要です。通級での指導を日常の学校生活に、より生かしていくためには、在籍する通常の学級担任等と通級指導の担当教員とが、適宜指導の様子や学習の進捗状況等について情報交換を行うことが大切です。両者が対象児童生徒の情報を共有することにより、通級による指導の効果が通常の学級においても波及することへつながります。



学習指導班より

「居心地のよい学級づくり」と「学力」の関係について

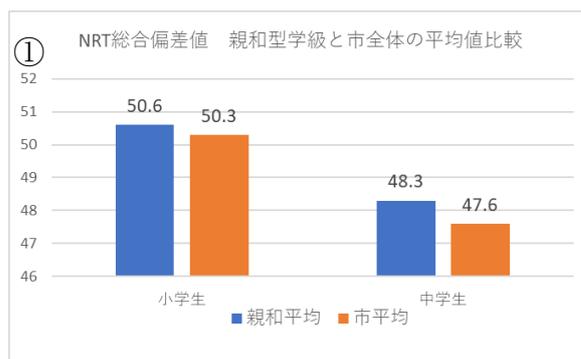
居心地よい学級づくりを主要事業として位置付けた取組の3年目が終わりになります。明らかに不登校の未然防止について成果が見られてきました。一方学力ですが、数値的な評価にはまだまだ繋がってはいません。しかし、居心地のよい学級づくりに取り組むことで、少なからず学力に影響を及ぼすことは、この3年間の取組で見えてきました。

次の3年に向けて、「居心地のよい学級づくり」と「学力」について、今まで紹介したデータを基に改めて確認します。

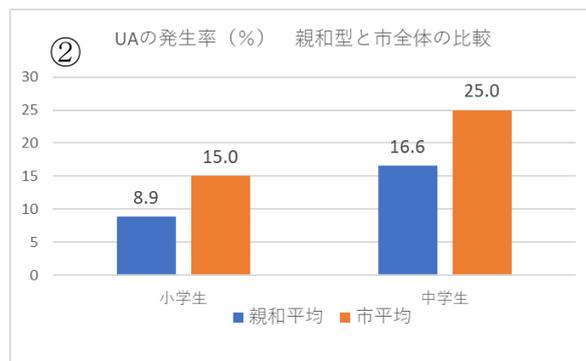
1 「居心地のよい学級づくり」と「NRTの結果」について

グラフ①②は、令和4年度のWEBQU 2回分と令和5年度6月のWEBQUの結果において継続して親和型だった学級のNRTの状況について、まとめたものです。親和型の学級の方が、NRT総合偏差値が高い傾向にあり、またUAの出現率は低い様子が分かります。

ここで大切なことは、1回の調査だけでは



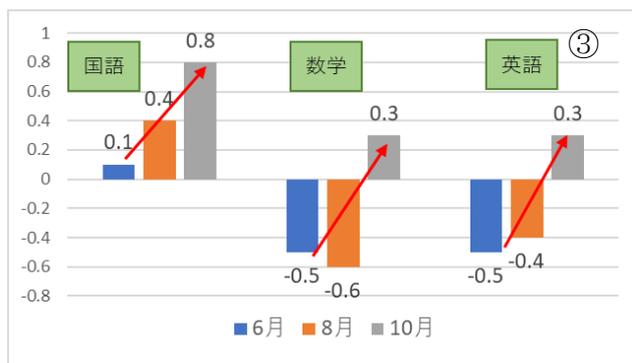
なく継続して親和型である場合に、学力に影響を与える傾向にあるということです。全学級がこの例にピッタリと当てはまるわけではありませんが、今後も早期に親和型の学級づくりを進め、また、親和型の学級はその状態を継続することが大切だと言えます。



2 「居心地のよい学級づくり」と「にいがた学びチャレンジの結果」について

右のグラフ③は、ある学級の「にいがた学びチャレンジ（調査当時はWeb診断問題でした）の正答率の県との差の変化です。

この学級は2回のWEBQU調査で親和型だった学級です。国語では県との差が+0.1から+0.8に向上し、数学と英語では、県との差がマイナスからプラスに向上しています。この結果からも親和型や集団の発達段階を高い状態で維持できていることが大切であることが分かります。



親和型の学級は「主体的・対話的で、深い学び」のある授業づくりの実現も図られていると推測しています。今までの取組で、各校にはたくさんの実践が蓄積されてきていると思います。うまくいっているところは継続し、課題があるところは全職員でアイデアを出し合い、引き続き「居心地のよい学級づくり」が捉える「学級づくりと授業づくり」に取り組んでいきましょう。

学校教育課・教育センター事業のお知らせ ～2・3月～

日時	内容・会場	備考
2月 7日	令和7年度市教育センター事業説明会	Zoom オンライン
2月25日	十日町市小中一貫教育推進協議会 令和6年度第2回会議	川西庁舎4階 第1研修室

【表紙写真の説明】

各中学校区では、小学生と中学生とが交流する場を工夫してもらっています。様々な活動の中から3つの例を紹介します。

1 吉田中学校区 陸上練習交流会（9月12日）

吉田中学校を会場に中学生と小学生とが陸上競技の練習を行います。小学生は親善陸上大会が近いので、自分の記録を向上させたいと思い、中学生のアドバイスを熱心に聴いていました。中学生も小学生に励ましの言葉掛けやフォームが良くなったところを認める声掛けをしていました。互いの笑顔がさわやかな印象を受けました。

2 下条中学校区 小中交流会（10月24日）

下条中学校区は、小学校1・2年生と中学校3年生、小学校3・4年生と中学校2年生、小学校5・6年生と中学校1年生が年間を通じて交流活動を続けています。写真は小学校3・4年生と中学校3年生が下条中学校の体育館でゲーム交流をしている様子です。ゲームの司会・運営は小学校4年生が中心になって行いました。中学生はゲームの説明を聴きながら、内容をよく理解し、上手に小学生をサポートしていました。

3 松之山中学校区 ハートウォーミング集会（12月3日）

自他を理解し、大切にしようとする活動を通して、いじめの未然防止に取り組むことをねらう「ハートウォーミング月間（12月7日～12月24日）」の中に位置付けられ、全校児童生徒が委員会の活動を見たり、班ごとに目当てを作ったりする活動をしました。毎日同じ校舎内で学ぶ小中学生の心の距離の近さを感じる集会活動でした。